

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 68 号

特集

東京世界陸上と
日本初開催デフリンピック
を楽しむ

この人は誰だろうか？

無料



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 第68号を発刊するにあたり

長田 渚左

■特集■

「東京世界陸上と 日本初開催デフリンピックを楽しむ」

- | | | |
|----|--|----------------|
| 4 | 東京世界陸上 TBSの挑戦 | 構成
阿部 雄輔 |
| 14 | 日本初開催デフリンピックに注目——中島幸則 | 構成
首藤 正徳 |
| 24 | デフと2つの絵本 | 山内 亮治 |
| 26 | 2つの世界大会にWチャレンジ——湯上剛輝 | 取材・構成
首藤 正徳 |
| 29 | 父・猪谷六合雄は戦時下で
いかに千春を育てたのか | 取材・構成
長田 渚左 |
| 38 | 『走』第15回
スマホを見ながらのクルマの運転は、目を閉じて運転するのと同じ！ | 玉木 正之 |
| 39 | 夢劇場『馬』No.40「極意」 | 長田 渚左 |
| 40 | バックナンバーのご案内 | |

表紙・南 伸坊 表紙の人物は、デフリンピックの創始者ユジェーヌ・リュバン＝アルケさんです。私はデフリンピックという呼称さえ初耳でした。いろいろ検索した結果アルケさんの顔写真にたどりつきました。絵にしたいくなるいい顔です。

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第20、40～65号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、ジャンルを問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第68号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



今年はこちらで昭和100年にあたり、終戦から80年の節目でもある。さまざまなメディアで時代を振り返る特集が組まれている。

本誌も前号67号で『スポーツと戦争Ⅲ』と題する特集をした。紙離れが加速している昨今だが、編集部に反響の手紙が連日のように数多く寄せられた。

俳句仲間やサッカー教室の子どもたちに配りたいなどの理由で、追加で複数冊注文される読者も少なくなかった。個人的に配布していただけることには、頭が下がる思いがした。

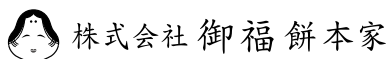
大手新聞社の方からは、社会部時代に毎年夏に戦争関連の特集を組んだが、スポーツを絡めた企画を考えたことは一度もなく「67号に感心した」と、評価していただいたことは素直に嬉しかった。

近年、世界各地で再び戦火が絶えない時代になった。外国人差別や分断が国際社会全体に急速に広がっているように感じる。そんな世界情勢だからこそ、国籍や人種、宗教の違いを超えて人々が集うスポーツは、ますます大きな役割を担うと思っている。

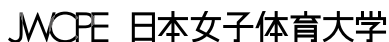
今から約70年前、冬季オリンピックのアルペンスキーで猪谷千春さんが銀メダルを獲得した。終戦からわずか11年、敗戦国の若者の快挙は、スキーの本場ヨーロッパの人々を驚かせた。あの戦時下の日本で彼はどのように育まれたのか。今年94歳を迎えた猪谷氏本人を取材した。

そして今秋には日本で大きな国際競技大会が2つ開催される。9月に34年ぶりに世界陸上が東京で開催され、11月にはデフリンピックが日本初開催となる。日本選手への注目はもちろんのこと、世界中のアスリートたちへのリスペクトを込めて特集を組んだ。大会を楽しみながら、スポーツの力、可能性を肌で感じたい。

ご協賛およびご協力企業・団体



人と社会を支える力



(順不同)

東京世界陸上 TBSの挑戦

構成 阿部雄輔
写真 山内亮治



9月13～21日の9日間、第20回世界陸上が東京・国立競技場をメイン会場に開催される。前回の東京開催は34年前、1991年の第3回大会で、この時は日本テレビが放送した。97年の第6回アテネ大会からTBSが世界陸上の放送を始め、今回は地元局として中継以外にもさまざまな分野に取り組む。プロデューサー3名がTBSの挑戦を語る。

上から時計回りの順で

保坂 龍之助(ほさか・りゅうのすけ) 1976(昭51)年11月13日生まれ。2004(平16)年、TBSテレビ入社。スポーツ局で夏季オリンピック5大会、世界陸上8大会、マスターズゴルフ、WBCなどの番組制作を担当。21年にDXビジネス局、24年にスポーツ局に異動し、現在同局コンテンツプロデュース部部長代理。

七澤 徹(ななさわ・とおる) 1984(昭59)年9月26日生まれ。2007(平19)年、TBSテレビ入社。以来一貫してスポーツ局でサッカー日本代表取材担当、「炎の体育会TV」演出、「SASUKE」、世界陸上の番組制作などを担当。同局コンテンツプロデュース部所属。

西村 和大(にしむら・かずひろ) 1988(昭63)年12月2日生まれ。2012(平24)年、TBSテレビ入社。営業局勤務を経て18年にスポーツ局に異動。陸上、駅伝、オリンピックなどの番組制作及び世界陸上3大会で制作を担当。同局コンテンツプロデュース部所属。

中継外の多面的な取り組み(七澤徹)

最初に組織の座組を説明します。TBSと東京都、そして大会組織委員会である世界陸上財団、主にこの三者を中心に打ち合わせをして、どうやってブームアップしていくか、どういう施策を打っていくかを考え、主催のWA(世界陸連)に承認を得て進めるという座組で取り組んでおります。

今大会、TBSは「人々の豊かな心の醸成と健康への貢献」「TBSブランドの価値向上と無限の拡大」という2つのミッションを掲げました。

そしてミッション達成のために設定したのが「9日間フルスタジアムの実現」「東京世界陸上の社会現象化」「東京世界陸上のコンテンツ最大化」「顧客の圧倒的満足度」という4つのビジョンです。

この中で一番キーになるのが、「9日間フルスタジアムの実現」です。先日、陸上の日本選手権が国立競技場で行われました。マックス5万人が入る競

技場ですけども、3日間で初日1万2000人、2日目1万6372人、最終日1万4715人。正直これが今の陸上の現実というのもあって、フルスタジアムはかなり難度の高いミッションです。夜のセッションに絞ると、フルスタジアム実現のためには1日5万枚×9日間＝45万枚のチケット販売が必要ですよ。夜のセッションに関しては6月末までにおよそ33万枚、全体の約75%が売れていて、まずまず好調な数字です。もともと陸上競技が好きな人たちだけでは国立競技場は埋めきれないので、陸上に興味を持っていない人をどう取り込むかがテーマになります。

そのためにも今回3人の方にPR大使になっていただきました。まず皆さんご存じ、97年から13大会連続でMCを務めていただいた織田裕二さん。今回は大会全体の顔であるスペシャルアンバサダーとして、先頭に立って盛り上げていただきます。TBSのアンバサダーに就任していただいた女優の今田美

桜さんは、中学時代に走幅跳の経験があつて、陸上に対する熱もおありの方です。もう一人、若者に絶大な人気を誇る&TEAMエンティムというグループのKさんに応援サポーターなつていただきました。Kさんも高校時代、強豪校で中・長距離をやつていて、青学大の原晋監督にスカウトされそうになつた経歴を持つています。

このような方々を起用しながら、「1秒後、世界は変わる。」というキャッチコピーを設定しました。6年前のラグビーワールドカップ日本大会の「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」というコピーをつくつた吉谷吾郎さんと打ち合わせを重ねて決定したものです。大会組織委員会も非常に気に入つてくださり、大会公式のキャッチコピーにも採用されました。

フルスタジアム・視聴率最大化に向け、まずは放送を通じて盛り上げようと、織田さんに1月3日放送の「マツコの知らない世界」に出演していただき

ました。TBSの社員として、夏のコンテンツに対して年始からPRするのは正直記憶にありません。他にも「オールスター感謝祭」「ひろおび」「ラヴィット」など様々な時間帯に、チャンスがあれば陸上選手やPR大使の皆さんにご出演いただいています。我々は放送以外にYouTubeもやっています。が、サッカー元日本代表の本田圭佑さんに国立競技場で陸上競技を体験していただいて、競技の難しさや陸上選手のすごさを身をもって体験していただき、それをまとめたYouTubeを流して、もう40万回以上も再生されています。

それから大会期間中、国立競技場の周辺にある意味フェス化する計画を立てています。路面にトラックを引いて国立競技場までの導線をつくつて没入感を演出したり、「せつかくグルメ」という人気番組のブースを出したり、「SASUKE」の「そり立つ壁」が出たりする予定です。

また今回、世界陸上財団からいろんな業務を受注

しており、これはTBSとしては新たな事業モデルに挑戦ということになります。

たとえば柴犬をモチーフとした「りくワン」というマスコットをつくりました。TBSのデザインセンターという部署に所属する人間が講師役になり、子供たちの意見を形にしたものです。この規模の世界大会のマスコットを放送局が制作するのは、恐らく世界でも初めてだと思います。さらに大会全体のコアグラフィックと言うんですけども、パンフレットとかポスターとか、国立競技場の装飾で使われるデザインもTBSデザインセンターで作成しました。大会公式のPRポスター、PR画像、WAの公式PR動画なども制作しております。またPRイベントの企画・運営、チケットの販売もTBSが委託を受けて行っています。また「進撃の巨人」とかサンリオの「キティちゃん」とか「ストリートファイター」とか、世界で人気のIPとコラボして世界陸上のグッズをつくって販売する予定です。

それから「バトンプロジェクト」と言つて、東京のすべての小学校、約1400校に運動会シーズンの前にリレーのバトンを寄贈しました。これもTBSが間に入つてプロジェクトを実施しました。5月にはサニブラウンさんや橋岡優輝さんが実際に小学校を訪問して寄贈するイベントも行いました。

それから2007年の大阪大会以来18年ぶりに、TBSがロード種目、マラソンと競歩の国際映像の制作を担います。

放送だけでなく配信も行います。放送ではいろんな競技を行ったり来たりチョイスするんですけど、ひとつの種目をノーカットでお届けするようなことをTVで行います。さらにXだったりYouTubeだったり、いろんなチャンネルでわれわれの映像や情報を発信していく予定です。

以上、TBSは放送局ですから高視聴率を取る、良い放送を届けるのがもちろん大目標ではあるんですけども、それだけではなく世界陸上というコンテ

ンツを最大化させて、さまざまな角度から大会の成功に向けてアプローチしています。

世界陸上の中継体制(保坂龍之助)

TBSがどのように世界陸上を中継してきたか。
“走る” “跳ぶ” “投げる” 種目が同時に行われる陸上競技をどのように中継してきたのか。メインスタジアムで行われるトラック競技とフィールド競技について、6年前のドーハ大会を例に舞台裏をお話します。

まず競技の映像に関しては、トラック、フィールドそれぞれの国際映像がベースになります。加えて競技を全方位でカバーできるようにユニカメラというTBSの独自カメラをスタジアム内8カ所に配置しました。さらにインタビュエリアや観客席上方に設営したテレビスタジオ、織田裕二さんや中井美穂さんが競技のプレゼンをするポジションです。さらに、競技場外のウォームアップエリアにも独自カ

メラを配置しました。

これらの映像を現地のMCR（マスターコントロールーム）という仮設の部屋で選択します。それぞれの競技には現地実況席にて日本語の実況音声に乗せ、オンエア用プログラムを制作し、TBS本社に届け、CGや競技紹介VTRを付加し、放送しております。

ドーハ大会8日目はいろんな注目種目がありました。男子4×100mリレー予選には、前回ロンドン世界陸上で銅メダルを獲得した日本代表チームが出場。フィールド種目の男子走高跳決勝では、前回大会金メダルのバーシム選手が地元カタールでこの種目史上初の大会連覇に挑む。さらに、女子400mハードル決勝には、大会前に世界記録を更新したアメリカのムハマド選手が登場します。

特に走高跳は中継難易度の高い種目です。一人の選手が3回連続で失敗すると競技終了する、いわゆる脱走ゲームです。どの高さで勝者が決まるのか？

前回大会の金メダルが2 m 35 cm、大会前のシーズン最高記録が同じく2 m 35 cmでした。故に2 m 30 cmを超えてくると勝負は佳境を迎えるであろうと想定しました。さらにバーシム選手の跳躍時はスタジアムの応援は最高潮に達するであろう。可能な限りライブでこの空間を視聴者に届けるべきと考えました。

最初に男子走高跳決勝が始まり、その最中に男子4×100 mリレー予選が始まりました。日本は予選2組目です。1組目が終わって国際映像ではまだ1組目のスローVTRが流れている段階で、我々は独自カメラで4人の日本人選手をとらえ、実況解説でも日本チームに触れ、いよいよ日本チーム登場というのを視聴者に伝える映像音声を制作します。

レース前には必ず全チームを紹介する、いわゆる「レーンバイレーン」がありますが、そこまでには国際映像に戻ります。全チームと出走レーン紹介は大切になっています。

予選を終え日本は無事、決勝進出しました。この

間、走高跳の高さは2 m 27を終え、4人が脱落し、残るは8人。高さは2 m 30に上がります。国際映像ではリレーレースのリプレイ中ですが、我々の放送ではバーシム選手の順番が近づいていたので、フィールドの国際映像を選択。バーシム選手の成功跳躍をライブで届け、ちょうど日本チームがインタビューエリアに到着したので、独自カメラで日本選手のインタビューもライブで届けました。

続いて、女子400 mハードル決勝です。このレースで注目のムハマド選手が再び世界記録を更新する、歴史的な瞬間が生まれました。

ムハマド選手はワールドレコードを表示するタイマーへ向かいます。その時、走高跳ではバーシム選手が2 m 33 cm 1回目の跳躍順を迎えます。この時は悩みました。我々は世界新記録誕生の余韻に浸るスタジアム映像を追いすぎ、バーシム選手の跳躍をライブで逃しました。2 m 33 cmがメダルを決める高さになった可能性もあり、実はちょっと後悔するところ

ろです。

バーシム選手は2 m 33 cmの1回目、2回目も失敗しました。次に失敗したら競技終了です。その間、トラック競技では男子3 0 0 0 m障害決勝のレーンバイレーンの時間を迎えました。今にも始まりそうな気配でした。実は我々はスタジアムの競技進行を決める方々の会話を傍受していたので「バーシム選手の跳躍を優先し、その後に男子3 0 0 0 m障害決勝のレーンバイレーンを開始する」この情報により、我々は走高跳の映像を選択し、バーシム選手の2 m 33 cm、3回目のジャンプ成功の瞬間をライブで伝えることが出来ました。バーシム選手はその後、記録を2 m 37 cmまで伸ばし金メダル。みごと地元の大会で史上初の同種目連覇を達成しました。

このように同時多発の陸上競技の中継制作には独特の難しさがあります。それを踏まえて今回の東京大会に向けてどのようにやっていくのか。西村プロデューサーからお話しします。

今大会の中継方針（西村和大）

今大会の中継方針をお話するにあたって、前回ブダペスト大会の中継で致命的な、ここで申し上げるのもお恥ずかしいレベルのミスが2つございました。その話をさせていただきます。

まず男子棒高跳決勝で、スウェーデンのデュブランティス選手がはやばやと優勝を決めて世界新記録に挑戦したんですけど、それまでトラック競技をライブで見せることを優先して、棒高跳をVTRに回していたせいで放送が後手後手になって、デュブランティス選手の世界記録挑戦の1本目をライブで中継できない事態になりました。

もうひとつが女子やり投決勝で、北口榛花選手が1投目でトップに立ったんですけど、直後、次の選手が逆転投擲とうてきを投じているんです。国際映像は当然ありましたが、TBSのカメラは北口選手を撮り続けていて、それを見せられなかった。その後北口選

手が逆転して優勝するんですけど、もし逆転していなければ、優勝投擲をライブで見せられなかった。

なぜ起きたかという理由はいろいろあるんですけど、とにかく一回世界陸上というものを棚卸して、世界陸上を放送するとはどういうことか、一から考え直さなくてはいいかと考えました。

91年東京世界陸上や箱根駅伝の番組を制作された日本テレビの坂田信久さんや田中晃さんの著書で勉強させていただいたんですが、田中さんの『準備せよ。』に書かれていたのは、箱根駅伝は襷の重さ、襷渡しを伝えるのが本質であると。じゃあ1位が交代するシーンと襷渡しと同時に起きた時にあなたはどっちを取りますかと。TBSの感覚、ニューイヤ―駅伝の感覚では1位交代の方が百倍重要なんですけど、箱根駅伝の本質が襷の重さであるなら、襷渡しを映さないのはあり得ない。中継所を撮りながら1位交代をライブで見せるんだっていう方針が具体的に書かれていた。テーマが具体まで落とし込まれ

ているのに衝撃を受け、感銘を覚えました。

そこでまずスポーツ中継に共通する本質って何だろうと私なりに考えました。もちろん絶対的な正解があるわけではないし、それぞれ競技ごとの特徴はあるんですけども、試合が決まる瞬間にその試合の魅力を100%伝えること。それがすべてのスポーツ中継に共通して必要なものなのかなと。

最後のホイッスルが鳴る瞬間だけじゃない。たとえば2009年の第2回WBC決勝で言えば、10回表にイチロー選手が決勝タイムリーを打った瞬間。そこに向けてどれだけ準備できて、布石を打って、欲しいシーンを撮っていたか。ライブで見せるのはもちろん大前提として、そこまでの過程やそのあとの余韻、視聴者が感情移入できるように前提知識を、しっかり分かりやすく届けられているか。

世界陸上には試合が決まる瞬間がいっぱいあります。北口選手が優勝投擲を投げている裏で、田中希実選手が入賞している裏で、とんでもない世界記録

が生まれる可能性がある。歴史に残るものが同時に起きるのが世界陸上で、これをしつかり届ける。伝えなきゃいけないものを伝えるべき順番で伝えることが世界陸上中継の本質だと考えました。

翻つてブダペストのミスを考えると、同時多発的に起こる出来事に対してみんなが同じ重要度で、同じ方向を向いて考えていなかった。具体的なルールとして共有できていなかった。

そこで今大会の中継テーマを「1秒後の魅力を100%伝える中継」としました。先ほどの「1秒後、世界が変わる。」というキャッチコピーに基づいてつくったものですが、1秒前に世界が変わっていたとか、今もう変っちゃつてるといふような恥ずかしい中継は絶対にしないというのが、今回の中継方針になります。そして伝えるべきことの優先順位を明確にしました。これまで言語化していなかったものを今回、具体的にルールとして明示しました。

最優先は「日本人がメダルを獲得の瞬間」。優先順

位2番目は「世界新記録誕生の瞬間」です。このルールに基づくデュプランティス選手の挑戦を後回しにすることは絶対になります。3番目は「日本人の入賞」。4番目は選手とか競技のヴァリユーによって変わってくるんですけれども、「日本人の決勝進出」と、外国人だけでも「メダルが決まる瞬間」。そのあとに「日本新記録」だったり、「日本人の準決勝進出」が来る。これを明確にしてスタッフで共有し、起こり得る全パターンを、この時はこうする、この時はこうすると話し合っています。

直近で一番盛り上がったのが大会6日目、先日の日本選手権で崎山雄太選手が日本歴代2位、87m16の記録を出して一躍メダルの可能性が出てきた男子やり投決勝と、久保凜選手が出場する女子800m予選が重なる局面です。これまでの慣例ではトラック競技がフィールド競技に優先し、重なる場合はトラックをライブで、フィールドはVTRに回していましたし、久保選手が予選を突破して準決勝に進出

すれば日本選手史上初、人気の女子高生ランナー久保凜だからという話もあるんですけど、でも崎山選手がメダルの懸かった投擲をするならば、優先順位の原則ルールに基づいて、ライブで見せるのは崎山選手になります。これは事前に決めておかないと、本番ではできない判断です。

最後に本大会の注目種目、選手を紹介します。

やはり大注目な女子やり投連覇に挑む北口選手。達成すれば男子20km競歩の山西利和選手に次いで日本選手2人目、女子では初となります。決勝は大会8日目、9月20日です。

大会最終日、9月21日の最終種目は男子4×100mリレー。悲願の金メダルに向けて、必ず日本チームがこの舞台に立っていると思います。

男子1000mは今、史上まれにみるハイレベルな大接戦の時代です。前回ブダペストではアメリカのライルズ選手が1000m、2000m、4×1000mリレーの3冠を達成しました。パリオリンピック1

000mも金メダルでした。この時銀メダルだったジャマイカのトンブソン選手が、今年もう9秒75で走っています。僕はもしかしたらトンブソン選手が東京で世界歴代2位の記録、9秒68以内で走ってくるんじゃないかなと思っています。そしてサニブラウン選手が決勝に残ってそこに立ち向かっていくというのが男子1000mの見どころです。大会初日9月13日に予選、2日目の14日に決勝があります。

最も世界新記録が出る可能性が高いと思われるのが男子棒高跳のデュプランティス選手。まだ25歳ですがすでに12回世界記録を更新していて、大会3日目の9月15日、世界新記録に挑戦するシーンが見られると思います。

(本稿は2025年7月17日、東京都新宿区・早稲田大学戸山キャンパスで行われた「第132回スポーツを語り合う会」の講演をもとに構成したものです)

日本初開催デフリンピックに注目 —中島幸則

構成 首藤正徳
写真 山内亮治



「耳が聞こえない、聞こえにくい人のためのオリンピック」と言われるデフリンピックが、今年11月15〜26日の12日間、「東京2025デフリンピック」として日本で初開催される。100年の歴史を誇る国際競技会だが、日本での認知度はオリンピックやパラリンピックと比べるとまだ低い。そこで日本で唯一の聴覚・視覚障がい者のための国立大学となる筑波技術大学の教授で、聴覚障がい者アスリートのトレーナーとして25年のキャリアを持つ中島幸則氏に、大会の特徴や魅力、見どころについて語ってもらった。

(本稿は2025年4月19日、東京都新宿区・早稲田大学戸山キャンパスで行われた日本スポーツ学会「第131回スポーツを語り合う会」の講演をもとに構成したものです)

デフリンピックを手話で表す中島幸則氏

中島 幸則(なかじま・ゆきのり) 1962(昭37)年8月21日、東京都生まれ。柏南高校・順天堂大学体育学部卒業。スポーツトレーナーとして東京慈恵会医科大学スポーツ医学研究室でアスリートのリハビリなどを指導。2000年サッカーU-17日本代表チームに帯同。2009年デフリンピック日本選手団本部トレーナー。2010年3月に聴覚障がい者の平衡機能に関する研究で順天堂大学医学部医学研究科にて医学博士を取得。現在は国立大学法人筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター教授。日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー、日本パラスポーツ協会障がい者スポーツトレーナー・中級スポーツ指導員。

私は現在、筑波技術大学で体育の教員をしており
ます。スポーツトレーナーとしても40年活動をして
います。デフスポーツの世界に入る以前はサッカー
の世代別日本代表チームにも帯同していました。2
004年にはU-19（19歳以下）日本代表チームで、
現日本代表監督の森保一さんや、本田圭佑選手とも
一緒に仕事をさせていただきました。

デフスポーツには2003年から関わり始めまし
た。自分の娘が聴覚に障害があることもきっかけで
した。当時、デフの各競技に資格を持ったトレーナ
ーがいなかったのも、サポートして盛り上げなけれ
ばと思い、以来、聴覚障害のあるアスリートのトレ
イナーを20年以上やっております。

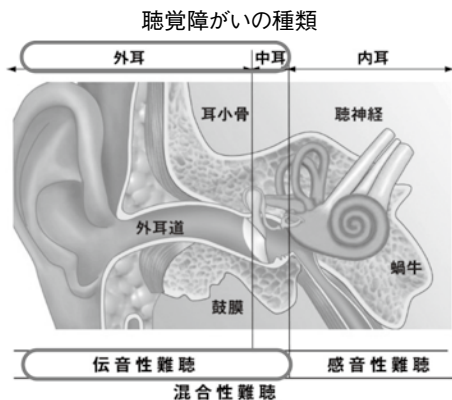
デフリンピックの「デフ」は英語で「聞こえない」
という意味です。デフリンピックは「デフ」と「オ
リンピック」を合わせた国際的スポーツ競技会の名
前ですが、「聞こえない」だけではなく「聞こえに
くい」人も出場できます。ですのでデフリンピック

を理解するためには、まず聴覚障害とは何なのか、
ということを理解していただきたいと思っています。

音と言葉はちがう

耳は外側から外耳、中耳、内耳に分かれています。
外耳で音を集めて鼓膜まで伝え、中耳で音を増幅さ
せて、内耳で音の振動を電気信号に変換して、声や
音が皆さんに届きます。このどこかに問題があつて、
聞こえない、聞こえにくい人がいます。外耳、中耳
に問題があるのを「伝音性難聴」といいます。内耳
に問題があるのを「感音性難聴」といいます。2つ
は大きな違いがあります。

伝音性難聴は内耳の感覚細胞に十分な大きさの音
が届かない状態なので、補聴器や人工内耳などの補
装具を付けて音を増幅すれば、聞こえやすくなり、
改善が期待できます。一方、感音性難聴は、内耳自
体に問題がある、または脳に信号を送る聴神経の障
害に起因するため、補装具で音を増幅してもなかな



<https://panasonic.jp/hochouki/deafness/structure>

か改善は期待できません。音が聞こえる人もいますが、何を言っているのかはよく分かりません。私の娘も感音性難聴で、補聴器をしてもあまり効果はありません。

人工内耳は手術をして取り付けます。内耳に音を直接入れるためです。最近は生まれてすぐに手術する子どもも増えていきます。私の娘も手術すれば聞こえるようになるかと簡単にドクターに言われました。

でも親が勝手に決めるのはどうか、子どもに選択させたいと思います、手術はしませんでした。今でも補聴器で

生活しています。

補聴器や人工内耳を付けると音が聞き取れる人はいます。でも言葉がはっきり分かるわけではないんです。「音と言葉は違う」ということです。補聴器で音を聞き取れることはできるかもしれないけど、言葉聞き取っているわけではありません。ですのでほとんどの聴覚障がい者は口の動きを見ながら、相手が何を言っているのかを理解していると思っています。補装具を付けてもうまく聞き取れず、手話だけで生活している人もいます。

では、どういうふうに聞こえているのか？ ということですが、文字でたとえるなら、伝音性難聴の人は文字が小さくなり、色も薄くなつてメガネをかけたくなるような感じです。だから補聴器を付けます。感音性難聴の人は文字の形も崩れて、色も薄くなり、解読困難という感じでしょうか。補聴器を付けると色は多少濃くなつて、形も何となく分かるようにはなるけど、文章としては理解できないものが

耳に入ってくるんです。それを彼、彼女たちは「分かった」と答えるんです。聞き返すのが申し訳ないと思つて、自分なりの理解で終わつてしまふんですね。

実は私がこの世界に入つたのは、デフバレーボールの監督が病院に診察に来たのがきっかけでした。当時、私はその病院に勤めていました。監督の耳を見たら補聴器をしていたので「サポートしましょうか?」と言つて一緒に診察室に入りました。診察後に「トレーナーをしているので、何かあったら連絡ください」と言うと、監督も「分かりました」と答えたのですが、翌日、デフバレーボールのホームページを見たらトレーナーとして私の名前が出ていました。その時はもう仕方ないと思つて、関わるようになりました。ですから「分かった」と言われたときには半分くらいしか理解していないと思つて「何が分かった?」と聞いてあげてください。

「横方向動体視力」と「全身反応」が速い

次に聴覚障がい者の身体特性についてお話しします。まず「バランスが悪い」です。目を開けた状態での片脚立ちは、聞こえない人もふつうにできません。でも聞こえない人は目を閉じるとすぐに倒れてしまいます。ウチの学生に体力測定でこの閉眼片脚立ちのテストをやっています。ほとんどの学生が目を開けると3秒くらいで倒れます。両脚で立つて行う重心動揺テストでも、目を閉じると倒れてしまう学生がいます。私の研究で成人になつても30%の聴覚障がい者に三半規管の機能低下があるということが分かりました。「目を閉じると」というところがポイントです。

スポーツは目を閉じないから関係ないと思うかもしれませんが、ずっと目を開けたまま運動しているわけではありません。トレーナーとして聞こえない選手はバランスが悪いと感覚的に感じています。

次が「目がいい」です。これは「聞こえないハンディを目が補っているから」と何となくは言われていました。研究データがありませんでしたが、真下一策先生が発表された「健常者アスリートの動体視力」の研究データに、デフリンピックを目指す選手の数字を重ねてみると、横方向動体視力の数値がすごくいいことが分かりました。

横方向への反応がすごく速かった。理由は想像ですが、聞こえない人は手話で会話をします。例えば3人で並んで話をしていると、常に横、横、横に目を使っているので、横方向の動体視力に優れているのではないかと思われます。

もう一つが全身反応時間です。2 m先のランプが光つたら、その場でジャンプするテストです。これとすごく速い。目で見たものを筋肉に伝えるのが速いというのが分かりました。

実は光だけではなく、意外にも音への反応も速かった。ウチの学生と視覚障がい者のブラインドサッ

カー日本代表選手とロービジョン（弱視）サッカー日本代表選手を比べてみました。2 m先で音が鳴ったら反応してくださいというテストです。するとウチの学生の方が反応が速かった。聴覚障がい者が視覚障がい者の日本代表選手より音への反応が速いんです。

ということで聴覚障がい者の身体特性として「バランスが悪い」「目がいい」ということをぜひ理解してほしいです。

デフリンピックの歴史は百年以上

では本題に入ります。デフリンピックは国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）が主催する4年に1度開催される聴覚障がい者のための国際競技会で、聞こえない人、聞こえにくい人のためのオリンピックと言われています。夏季大会と冬季大会が2年ごとに交互に開催されています。

オリンピックは1896年、デフリンピック（前

身の世界ろう者競技大会）は1924年に第1回夏季大会が開催されました。ちなみにパラリンピック（前身のストーク・マンデビル競技会）は1948年、スペシャルオリンピックスは1968年第1回大会なので、障がい者の国際競技大会ではもっとも歴史があります。11月に東京で開催される夏季大会は第1回から101年となる第25回で日本初開催になります。

聴覚障がい者はデフリンピックには出場できませんが、パラリンピックには出場できません。2021年の東京パラリンピック開催後のアンケートでは、聴覚障がい者も参加していたと答えた人が65%もいました。これは残念でした。

なぜパラリンピックと一緒に開催しないのかと疑問を持っている人もいます。国際パラリンピック委員会（IPC）が発足した1989年当時は国際ろう者スポーツ委員会も加盟していましたが、いろいろと話し合った結果、別々の方がいいという判断にな

って1995年に脱退しました。もともとパラリンピックはリハビリテーションから始まりましたが、デフリンピックは記録を狙うところから始まっているので、オリンピックと同じルールで運営されています。その違いも一緒になれなかった一つのポイントでもあります。一方でオリンピックには出場できます。これまで両方に出場した日本人はいませんが、他国には大勢います。

デフリンピックの参加資格は、補聴器または人工内耳を外した状態で、左右の聞こえが良い方の聴力が55dB（デシベル）以上の聴覚障がい者です。55dBというのは中等度難聴で、日常生活の会話が聞き取れません。100以上になるとまったく聞こえません。競技会場では練習や試合に関係なく、補聴器等を装着することは禁止されています。人工内耳の場合は埋め込んでいるのはそのままですが、耳に引つけるマイクを外します。ですから選手たちは競技中は何も聞こえていません。

大会運営にも特徴があります。国際手話を用いることです。言葉と同じように各国それぞれ独自の手話がありますが、大会では世界共通の国際手話を使います。でも選手たちはそれぞれの国の手話でもコミュニケーションができます。聴覚障がい者は想像力がすごくあるので国際手話が分からなくても、自分たちの手話でコミュニケーションが取れるんです。これは素晴らしいなと思います。

各競技には視覚的な工夫がされています。陸上や水泳ではスタートの合図にランプを使います。音ではなく光を点灯させて知らせます。陸上ではランプが登場する前は、引き金を引くと煙がボーツと出るように特別に作られたピストルが使われていました。サッカーは笛を吹いても選手には聞こえないので、主審は旗を振ります。ピッチサイドのほかにゴール裏にも副審がいて、主審が旗を振ったら、副審も一緒に旗を振ります。柔道や空手などの武道競技では反則やポイント獲得などの合図が視覚で分かるよう

に、四隅にランプがあります。

発掘と強化

競技もルールもオリンピックと同じですが、ハンドボールや射撃、テコンドー、レスリングはまだ日本選手が出場したことはありません。日本開催なので何とか出場させたいと思い、2年ほど前から選手発掘に取り組んできました。

現在のデフハンドボール日本代表チームは、2022年にウチの大学で立ち上げました。学生が私に「先生、ハンドボールでデフリンピックに出場したいです」と言ってきたのが発端です。その後、トライアウトなどを経て、日本代表チームになりました。テコンドーはウチの大学の総合デザイン学科4年の星野萌さんが日本代表になりました。この競技の日本代表は彼女1人だけです。射撃にはウチの卒業生の柳田かれんさんが出場します。実は父親がオリンピック4大会に出場した柳田勝さんで、娘の監督

をしています。

注目のスタッフはほかにいます。女子バレーボールの監督は2008年北京オリンピック代表の狩野美雪さんです。17年大会ではチームを金メダルに導いています。男子は1988年ソウルオリンピック代表で、川合俊一、熊田康則と「ビッグ3」と呼ばれた井上譲さんが、コーチとしてサポートしています。女子サッカーは元男子フットサル日本代表主将の藤井健太さんがコーチを務めています。

日本はメダル獲得数の順位で10番以内には入っています。毎回、上位はロシアとウクライナです。17年のサムスン大会（トルコ）ではロシアが金85個を含む199個のメダルを獲得して1位。金21個で99個のメダルを獲得したウクライナが2位でした。今回、この2カ国は出場するんですかと聞かれますが、私は知りません。どうなることやら。日本は金6個を含む27個のメダルを獲得して6番目でした。22年のカシヤス・ド・スル大会（ブラジル）は新型コロナウイルス

ナウイルス感染者が増えたため、途中で棄権して帰国したにもかかわらず、金12個を含む過去最高の合計30個のメダルを獲得しました。着実に強化が進んでいます。東京大会も期待できると思います。

その最も大きな要因は選手を発掘できるようになったことです。昔はろう学校の卒業生が集まって日本代表チームをつくっていましたが、最近是一般の学校に通う聴覚障害の子どもたちがどんどん増えています。聞こえる人たちと一緒に競技をしていた子どもたちが、デフリンピックの存在を知り、集まってくれるようになって、競技力が上がりました。

ただ残念なことに日本ではデフリンピックの認知度がすごく低いです。パラリンピックは約98%と高いのですが、スペシャルオリンピックスは約18%でデフリンピックはさらに低くて約16%です。2021年の東京オリパラが終わった後の調査結果です。魅力や価値が伝わっていないのではないかとつくづく思います。認知度を上げるために筑波技術大学では

私と学生が一緒になって、この3年間で約15校の大学で授業をさせてもらいました。本年度はさらに10校から依頼がありました。

伝える工夫

デフリンピックの魅力について本学卒業生アスリートに聞くと、ろう者と聴者が一緒になって大会をつくる、共生を目指す良い機会になると言っていました。私もそう思います。デフリンピックは聞こえない人、聞こえにくい人たちの大会ですが、聞こえる人たちも一緒になって盛り上げる大会です。この魅力、価値を伝える大会になっているか評価するためにも、皆さんに会場に足を運んでいただきたいと思っています。

そのためにも聴覚障がい者とのコミュニケーション方法を理解してほしいと思います。手話以外でも書いて見れば伝わります。今はスマホのアプリが便利です。声を出せば文字になって伝わります。打

てば音声で返ってきます。もう一つはジェスチャーです。想像してジェスチャーをすれば伝わるんです。デフリンピックを知って、ぜひコミュニケーションを見直す機会にしてほしいです。

最後にヘレン・ケラーのお話をします。彼女は見えないう、聞こえない、話せないの三重苦の聖女と呼ばれていました。皆さんは「神様が三つの苦しみから一つだけ解放してくれる」と言われたら、どれを選びますか？ 私が講義に行くところの人の「見えるようにしてほしい」と答えます。でも彼女の答えは「耳が聞こえるようになりたい」でした。なぜか。「見えないことは人と物を切り離す。聞こえないことは人と人を切り離す」と言ったそうです。ですから皆さん、手話ができなくても、ぜひデフリンピックを機会に、聞こえない人とながつてください。コミュニケーションの方法を工夫すれば必ず伝わります。これを最後に頭に入れておいていただきたいと思います。

東京デフリンピックの日程 ※7月29日時点	競技	会場	11月													
			14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	
	開閉会式	東京体育館		●											●	
	陸上競技	駒沢陸上競技場など				●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	バドミントン	京王アリーナTOKYO			●	●	●	●	●	●		●	●	●		
	バスケットボール	大田区総合体育館			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	ビーチバレーボール	大森ふるさとの浜辺公園			●	●	●	●	●	●	●					
	ボウリング	東大和グランドボウル				●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	自転車(ロード)	静岡県日本サイクルスポーツセンター				●	●		●		●					
	サッカー	福島県Jヴィレッジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	ゴルフ	若洲ゴルフリンクス					●	●	●	●						
	ハンドボール	駒沢屋内球技場			●	●		●		●		●		●		
	柔道	東京武道館			●	●	●									
	空手	東京武道館										●	●	●		
	自転車(MTB)	静岡県日本サイクルスポーツセンター											●	●		
	オリエンテーリング	日比谷公園・日比谷エリア・伊豆大島	●	●					●	●		●				
	射撃	味の素ナショナルトレーニングセンター			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	水泳	東京アクアティクスセンター							●	●	●	●	●	●		
	卓球	東京体育館					●	●	●	●		●	●			
	テコンドー	中野区立総合体育館									●	●	●			
	テニス	東京有明テニスの森公園			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	バレーボール	駒沢体育館			●	●	●	●	●		●	●	●	●		
	レスリング	府中市立総合体育館								●	●	●	●			

デフと2つの絵本

山内亮治

プレイボールからゲームセットまで、野球の試合では審判がひとつひとつのプレーに明確なジェスチャーとともに判定を下す。今日では当たり前の光景を一人のろう者のメジャーリーガーが「発明」したことをご存知だろうか？

絵本『耳の聞こえないメジャーリーガー ウィリアム・ホイ』には、1888年から1902年にかけてメジャーリーグで活躍したウィリアム・ホイの野球人生と、審判のジェスチャーが考案された経緯が描かれている。

ウィリアムはろう学校を卒業後、靴修

理店で働きながら野球を続けた苦勞人。ジェスチャーが生まれた背景には、彼が試合中に経験した辛い出来事が関係している。

ウィリアムに限れば、「必要は発明の母」と言うべき出来事だったかもしれないが、球場に大型画面



現在、絶版になっています。



などなかった時代、ジェスチャーの導入により、観客も判定を視認でき、試合をより楽しむことが可能になった。またジェスチャーはサインプレー誕生のきっかけにもなったという。

野球界の発展に大きな功績を残したデフのアスリ

ートを知ってほしい。

スポーツ以上に、耳が聞こえないハンデに影響されるのは音楽の世界だろう。致命的と言ってもいい。そんななか、世界的なソロの打楽器奏者となった人物がいる。エヴェリン・グレニー。2回のグラミー

賞受賞など、数々の栄誉を手にしてきた音楽家だ。

エヴェリンは空気の震えを「体」で感じることで音を聞き、リズムを取ることを可能にしてきた。その事実を考えると、「障害を乗り越えた」という表現は彼女にとつて適切ではないかもしれない。「違うやり方がある」ということを見つけたにすぎないのだから。

デフであることで発明がもたらされた事例があれば、エヴェリンのように能力の開発につながった例もある。障害によって一見無理だと思える大きな困難の先にも、必ずどこかに道はあるのだ。

2つの世界大会にWチャレンジ

まよってる

湯上剛輝

取材・構成 首藤正徳

9月の東京世界陸上と日本初開催の11月のデフリンピックに、日本代表として「ダブル出場」に挑戦しているアスリートがいる。陸上男子円盤投げの日本記録保持者・湯上剛輝（32㉥トヨタ自動車）。5月にデフリンピック日本代表に選出された湯上は、世界陸上代表選考を兼ねた7月の日本選手権で参加標準記録（67m50）突破を目指したが、自身の日本記録の64m48にも及ばず57m45で3位にとどまった。欧州の3つの競技会をキャンセルして日本選手権に備えたという湯上は「1投目で気合が入りすぎて失敗した。後半もセカンドターンで気持ちが入りすぎて引つ張り気味になり、円盤が斜めに飛んでしま

うのが多かった」と苦笑い。気迫が空回りした。

もつとも参加標準記録の有効期間は8月24日まで、まだ時間は残されている。さらに今回は東京開催のため開催国枠がある。その開催国枠エントリー設定記録62m60はすでにクリアしている。

「世界陸上には選ばれるか分からないけど、11月のデフリンピックと並行して準備をしていくつもり」と、湯上は日本選手権後も2大会出場を念頭に調整していく方針を明かした。

生後間もなく先天性難聴の診断を受けた湯上は、生まれつき両耳の聴力がほとんどない。最初は補聴器を使用していたが、小学6年の時に左耳側の頭に



5月のアジア選手権で銀メダルを獲得した投擲

人工内耳を埋め込む手術を受けた。当時は球技をや
りたかったが、頭部に衝撃を受けるコンタクトスポ
ーツは危険なため、中学校で陸上を始めた。

その後、地元の滋賀県立守山高校で投擲^{とうしき}を始め、
中京大学時代に円盤投げで頭角を現した。あえて手
話は覚えずに大学まで健常者と一緒に学んだ。卒業
後はトヨタ自動車に入社。ずっとオリンピック出場
を目指してきたが、2017年のサムスン大会（ト
ルコ）でデフリンピックに初出場。55m58で銀メダ

ルを獲得して、2つの世界大会が目標になった。

翌2018年の日本選手権では3投目に日本人初
の61m台となる61m02の日本記録を樹立。その記録
を5投目に62m16に更新して初優勝。オリンピック
出場への希望の光が見えた。記録は世界ろう記録で
もあった。

しかし、2020年のコロナ禍を境に伸び悩む。
思うように練習ができず、投擲の感覚にズレが生じ
るようになった。日本記録も同年3月に62m59を出
した堤雄司に更新された。22年のデフリンピック・
カシマス・ド・スル大会（ブラジル）は、会場入り
直後に選手団から新型コロナウイルスが出たため出場
辞退し、日本も棄権した。2023年末、愛知から
地元の滋賀に練習拠点を移した。

成長曲線が再浮上したのは今シーズン。25年4月、
米オクラホマ・スローチャレンジで64m48をマーク
して5年ぶりに日本新記録を樹立して、世界陸上の
開催国枠エントリー設定記録（62m60）も突破した。

5月のアジア選手権では60m38で銀メダルを獲得。日本勢同種目34年ぶりの表彰台に上がった。

シンボルと決意

日本選手権を戦い終えた湯上は、今シーズンの躍進の理由について「以前は大きく振り回すことだけを考えていたが、今は効率的に力を出せるように足の動き、体幹、円盤の位置などを合わせられるようになった。また技術以上に試合で自分を信じることができるようになったことが大きなポイント。うまくできるんだろうかと自分を疑う時期があったが、それが改善された」と振り返った。

そして「これは自分が言っているのか分からないですが、僕が日本の第一線で戦っているというのは、デフのみんなにとって希望になると思っていますし、僕自身もやれるんだという希望を得られる」とも語った。聴者と同じ舞台で世界を目指しているデフアスリートのシンボルとしての自負もある。

報道陣をはじめ聴者との会話はほとんど支障がない。人工内耳で聞こえる音と、口の動きや表情から言語を読み取って相手の話を理解しているという。一方で競技中は円盤を投げるサークルに入る前に人工内耳のマイクを外す。無音になることで集中力を研ぎ澄ませるためだ。

オリンピックとデフリンピックに出場した日本人はまだいない。2028年ロサンゼルスオリンピックを目指す上でも、9月の世界陸上に出場して世界を体感しておきたいところだ。

「今年、世界陸上もデフリンピックも日本で開催されます。おこがましいですが、自分のために戦う場をつくってくれたのだと思っています。だから自分にとっても勝負の1年だと感じています」と湯上。

この原稿を書いている8月3日時点で世界陸上出場は決まっていない。日本選手権後、湯上は「まだ諦めない」とSNSに決意をつづっている。

連載 戦争とスポーツ

父・猪谷六合^{くにお}は戦時下で いかに千春を育てたのか

取材・構成 長田渚左

写真提供…猪谷千春



コルティナ・ダンベツツォ冬季オリンピックで獲得した銀メダルを手に喜ぶ猪谷親子。左から母・サダさん、千春さん、父・六合雄さん(1956年3月28日、羽田空港)



猪谷 千春 (いがや・ちはる) 1931 (昭6) 年5月20日、北海道・国後島生まれ。2歳からアルペンスキーを始め、五輪は52年オスロ大会から3大会連続出場。56年コルティナ・ダンベツツォ大会の男子回転で銀メダル。58年世界選手権でも回転で銅メダルを獲得した。57年米ダートマス大卒。59年米国のAIU保険入社。アメリカンホーム保険会社社長などを務める。82年にIOC委員となり、同理事を経て05年に同副会長。12年に定年を迎え、名誉委員に選出され現在に至る。同時に日本オリンピック委員会 (JOC) の名誉委員をはじめ日本オリンピックス協会副会長など、スポーツ界において多数の要職を占めている。

第25回冬季オリンピックが来年2月、イタリア北部の都市ミラノとコルティナ・ダンペッツォで開催される。

その大会からさかのぼること70年。1956年の第7回コルティナ・ダンペッツォ大会のアルペンスキー男子回転で、当時24歳の猪谷千春が銀メダルを獲得した。冬季オリンピック日本人初のメダルは終戦から11年での快挙で、欧州勢以外の男子が獲得した初のメダルでもあった。

彼は日本スキー界の草分けでもある猪谷六合雄くにおの長男で、幼い頃からスキーの英才教育を受けて育った。

1890（明23）年生まれの六合雄は幼少期から日清（1894～95年）、日露（1904～05年）と戦争が続ぎ、成人後は第一次世界大戦（1914～18年）、第二次世界大戦（1939～45）と、日本の軍国主義がさらに強まった。そんな戦争の時代に彼はどのような生活をして、千春を世界的なスキ

ー選手へと育てたのか。94歳の猪谷千春氏が当時を振り返った。

——猪谷さんは1931（昭6）年のお生まれです。スキーを始めたのは何歳だったのですか。

猪谷 2歳9カ月でスキーを履かされました。おふくろは親父に感化されて、私が生まれる前からスキーのジャンプをしていました。35mくらい飛んでいたそうです。ですから高梨沙羅選手の大先輩ということになります。

未知へ北上

——当時の日本は雪の上を歩く道具はあっても、雪の上を滑るスキーという行為は、まだ一般的ではなかったのですね。

猪谷 親父は1890（明23）年に、群馬県にある赤城神社の神主の息子として生まれ、後に赤城山の麓ふもとの両親が経営する猪谷旅館の手伝いをしていま

した。あるとき雪道で2本のシュプール（そりやスキーの滑った跡）を見つけて、何の跡か分からなくて、その跡を追いかけたそうです。そうしたら自分の旅館の玄関に長い板が立てかけてあって、東京から泊りに来た学生が履いていたスキーだと分かりました。それでスキーが欲しくなり、檜ひのきの木を細く削って、先端を炭火で温めたり、お湯に浸してそり曲げて、手製のスキーを作り出すのです。それからスキーに魅せられて、日本列島の山々を渡り歩く人生となりました。

——今で言うならアウトドアライフの元祖ですね。ジャンプ台まで作られたようですが、滑走技術は独学ですか。

猪谷 初めは実家近くの赤城山でスキーをしていたようです。^{まき}薪を積んで隆起した雪の上を、滑走すると体が浮いて、ジャンプの楽しさ、面白さを知って、スキーのいろんな可能性を感じて、どんどん日本列島を北へと北上していったようです。

——なるほど未知との遭遇を求めて北へ、北へと行ったというのは何ともロマンチックですが、樺太、信州、北海道と次々と旅をして、千島（樺太とともに現在はロシア領）まで足を伸ばします。六合雄さんの著書『雪に生きる』によると、その千島をとても気に入って6年も滞在。その間に千春さんが誕生しました。

猪谷 千島の春に生まれたので千春です。

——千島に行くまでサダ夫人と二人での旅でした。山を越える時には、お豆腐屋さんが使うラッパを吹いて熊を追いつたり、雄阿寒岳では蛇の群れに出会ったりして、生命に満ちあふれた自然に感動したりしています。お父さまはどんな方だったのですか。

猪谷 奇人、変人ですよ。「お金はどうしていたのだろうか」と今でも思いますよ。大工道具を詰めた大きなリュックを下ろすと、あちこちから廃材を集めて山小屋を建てました。本職は大工さんと思われるかもしれませんが、まったくの素人でした。スキーの

ゲレンデやジャンプ台の設計図を書いて、その通りに手作りしていました。青年時代を過ごした赤城山でも、どこからか蓄音機（当時のレコード盤を再生する機械）を手に入れて、モーツァルトやベートーベンを聞きながら、コーヒーを入れて飲んでいたと聞いています。カメラのライカも持っていて自然光でフィルムを焼きつける手法も知っていたようです。まあ外国かぶれだったとも言えますが（笑い）。

証明と訓練

——でも日本は軍国主義が次第に強まり、個人が自由を謳歌^{おうか}できない時代になります。そんな時勢で六合雄さんは第二次世界大戦中の1943（昭和18）年に『雪に生きる』という著書を出版しています。内容はスキーやジャンプ、山での生活などですが、自序で「わずかな時間の無駄も惜しんでよく働いたそれはスキーばかりではなく、大工をしても、編み物をして、畑を作っても、ほとんど全人格的な情

熱を打ち込んで精進を続けてきたと思う（中略）。しかし、今は重大な時局である（中略）。その時は、私たちの使い残した唯一の財産、工夫と精進する生活を持つてどこへでも出てゆこう」と書かれています。時代の不安から、どこへでも行く……生きる決意にも感じられますが、この戦時下でも小学生になった千春さんへの厳しいスキー指導は続けられていたのですか。

猪谷 厳格でした。あるとき長野県松本市番所のゲレンデの手入れをする^{ばんどころ}ことになって、乗鞍岳（標高3026m）も近くて良いというので、そちらに行きました。2km半ぐらい下ったところの小学校に通うことになったのですが、親父は表に私の帰



身体バランスの訓練で父の作った一本橋を渡る
写真提供:猪谷千春

宅時間を記して、遅いと怒られました。のんびり帰る友達の中を速足で歩いて帰宅して、家の手伝い、トレーニング、狭い斜面での猛練習など、次から次へとこなして、勉強もするスケジュールでした。およそ子どもらしい遊びなどさせてもらったことはないです。「何で自分だけこんな生活なんだ」とぶつかることも少なくなかったです。2人の間の緩衝材になつてくれたおふくろがいなかったら、私はつぶれていた。スキーの訓練は特に厳しくて、8歳の正月に乗鞍岳スキー山頂（登ってスキーで下る）をやらされました。

——千春さんの才能を開花させて、スキー選手にしたかったのでしょうか。

猪谷 選手にしたいなどとはまったく考えていなかった。そうではなくて、自分で考えて開発した独自のスキー理論や技術を世の中に証明したかったのでしょう。スキーを自在に操るには左右が同じ運動神経を持たないといけないというので、左手で箸を使

って豆を一粒一粒つまむ練習もさせられました。当時の技術では左へ曲がるときは左脚に体重を乗せるのが主流でしたが、私は右脚に重心を乗せる技術を自然にできるようになつて、親父も賛成していたのでそれを実践していました。後にスキーが本場の北欧の国の人々から（日本は）南方の亜熱帯バナナ畑の国だろうに、どうしてこんな技術を身に付けているのか”と言われ、私のスキー技術については海外でも驚かれました。

——当時、冬季競技では日本の存在は海外でほとんど知られていなくて、雪などない南の国と思われていたのですね。

猪谷 その通りです。

——話を戻しますが、長野県体育協会主催の競技会に出場します。千春さんは当時まだ9歳で、14歳以上でなければ出場資格がないので、競技の前走として滑りました。そこで優勝者と同じタイムをマークしました。そして、第二次世界大戦下の1943年、

11歳の冬に開催された明治神宮兼全日本スキー選手権大会（現在の日本選手権）で、また前走での滑降を許可されました。そのときは優勝した選手より6秒も速くて「神童現る」と大騒ぎになりました。

1943年は第二次世界大戦で日本にとって戦況悪化の転換点になった。アメリカ軍を中心とした連合国軍の本格的な反攻が始まり、日本軍が軍事拠点としていたガダルカナル島（2月）、アッツ島（5月）、タラワ島、マキン島（11月）の島々が次々と攻め落とされた。しかし、これらの不都合な真実は日本国内ではほとんど伝えられず、政府の報道統制により、戦況悪化後も日本軍は勇敢に戦っているといった虚偽の報道が国民に流され続けた。

才能と幸運

——第二次世界大戦では六合雄さんは50代半ばでしたが、幸運なことに日本軍に召集される年齢ではありませんでした。ちょうど中学生になる千春さ

んの才能を、戦時下でどうやって伸ばしていくか悩まれたようですが。

猪谷 親父は第一次世界大戦のときに一度召集されたようですが、戦地に赴く前に「青島の戦い」（1914年）が終わりました。第二次世界大戦は父も私も、召集される年齢ではありませんでした。ただ南太平洋の戦況が楽観視できないことは分かっていたようで、北海道の小樽、札幌、長野県の大町、飯山などさんざん調べて、一度は新潟県の土樽で3カ月過ごし、1943年に青森県の浅虫に一時滞在して、八甲田山の山奥へ移住します。

日本では1943年に兵力不足を補うために、20歳以上の学生を徴兵して出征させる学徒出陣が始まり、1945（昭和20）年3月には東京が無差別大空襲を受けて焼け野原となり、日本各地の都市や街も空襲で大きな被害を受けた。

——この頃、移住先の浅虫で猪谷一家は村人から非国民と呼ばれていたのですか。

猪谷 いやな思いはしましたが、山村だったので住宅が密集しているわけではなくて、家と家も離れていますから……親父も何とか耐えて乗り切るつもりだったでしょう。

——非国民だと思われていたことについてですが、国に協力しない特殊な思想を持つていると思われたい、スパイではないかと疑われて連行されたりするドラマや小説はよくあります。実際に拷問や処刑をされたという例もあったと思います。そういう不安はなかったのでしょうか。

猪谷 私が学校に行っていて、おふくろが山に山菜採りに行っていたときに、特高警察が二人訪ねてきたようです。家の中をいろいろ見て、出版した本を持つていったようですが、まあ問題にはならなかったのでしょうね。

——国内は物資不足が深刻で、食べる物にも困る時代でした。猪谷家は どうしていたのでしょうか。

猪谷 もともと自給自足のような生活でした。山に

行けば山菜、木の実、キノコ等がありました。60年に一度しか実がならないと言われている笹の実を粉にしてパンを作ったり、川で魚を採ったり、蛇がいれば捕まえていました。もちろん今みたいにステーキを食べたりはできなかったですが、山は食べ物の宝庫ですよ。

——強いですね、今みたいに何かがないとうとうしていいのかわからないという生活の対極にあるような生き方ですね。六合雄さんはどんな時代にも生きられた方ですね。

猪谷 そう、強いです。家も建てるし、改造もするし、考えて工夫する。靴下も編む人でした。

——1945年8月の終戦のとき、千春さんは14歳でした。徴兵される年齢には達していませんでした。

猪谷 いやあ、それがあと1年、いや数カ月戦争が長引いていたら、分からなかったのです。少年航空兵に選ばれていましたから。自分はまだでしたが、他の人たちはテイクオフ（離陸）だけの訓練を受け

ていました。

——いわゆる爆弾を積んだ飛行機で敵に体当たりする特攻隊の訓練ですね。燃料は片道分しか入っていないから、まず生きては戻ってこれない……。

猪谷 そういうことです。

——その後、千春さんは東京の知人の田島一男氏宅で下宿してもらって、高校時代を過ごし、偶然にも田島氏の勤めていた銀座のスポーツ用品店で、コーネリアス・バンダー・スター氏と出会う。そのスター氏との交流で米国の名門ダートマス大学への留学が決まる……というおとぎ話のような展開から、コルティナ・ダンペッツォ大会でのオリンピックメダル獲得へとつながる人生は、幸運の上の幸運という気がします。振り返っていかがですか。

猪谷 まさに隕石^{いんせき}にぶつかるような確率での出会いがなかったら、今の人生にはなっていないでしょうね。人生何が起こるか分からないとしみじみ思います。

1956年コルティナ・ダンペッツォ冬季オリンピック。アルペンスキー男子回転の競技場は濃霧に包まれた。アイスバーンの上を白いカーテンが覆っているような舞台で、サバイバルレースが続いた。順位は2度の滑走の合計タイムで決まる。1本目を不得意なコースと判断して抑えて滑走。6位につけた猪谷は、2本目に勝負をかけた。

アクシデントは第6旗門で起きた。勢い余ってコースをはみ出しそうになった。旗門は両足が通過しなくてはならない。当時のルールでは片足通過は集計タイムに5秒加算される。

旗の一本を股に挟みそうになる。しかし、彼はとっさに右足のスキーをカニのように180度開いて、そのままの状態で旗門を通過。軽業師のようなターンで次の旗門へ猛スピードで滑走した。後にこの瞬間技は『ブラックキャットのツバメ返し』と絶賛された。とっさのターンがなければ転倒かコースアウトで失格。あるいは片足反則を取られればメダルも

なかった。

——どうしてオリンピックという大一番で、素早い反応、神技が出せたのでしょうか。

猪谷 無意識でした。無我夢中でした。長い間の鍛錬の賜物たまものとしか言いようがないです。

——お父さまにとっても猪谷さんのメダルは独自の技術を証明した証になったということですね。

猪谷 人のマネをしていますが、その人以上にはならないです。自分で編み出した技術で勝負できたことは嬉しいことでした。そして親父はいつも「人を不快にさせることはしてはいけない」と繰り返し言うていました。ドアの開閉なども人を氣遣って閉めなくちやいけないと。

——人間にとってもつとも反自然的な、不合理なことが戦争です。今も世界中、あちこちで戦争や紛争が起きています。IOC（国際オリンピック委員会）委員の時代には、猪谷さんはオリンピック停戦にご

尽力されました。

猪谷 IOCは国連が意図する平和でより良い社会づくりにはスポーツがいかに大きな貢献をできるかをアピールし続けてきました。活動の一環として1992年に提案した『オリンピック停戦』が、翌93年の第48回国連総会で採択され、その後、オリンピック開催前年の国連年次総会でオリンピック停戦が採択されていますが、実効性、アピール力はご存じの通り弱いです。

——でも失望はしても諦めてはいけません。

猪谷 スポーツは人を集める力があります。互いを尊敬できるツールです。私自身、スポーツで決して諦めないということを学びました。70年前のオリンピック大会の2本目で「あつ失敗した」と諦めたらメダルはなかった。どんなときも諦めたらアウトです。スポーツが平和へつながることを忘れないでほしいです。

『走』第15回



スマホを見ながらのクルマの運転は、目を閉じて運転するのと同じ！

玉木正之

「レーシング・カーを時速300キロで走らせるときつて、眼は、いったい何処を見ているのですか？」

元F1パイロットの中嶋悟さんに、そんな質問をぶつけたことがある。

そのとき返ってきた答えに、驚いた。

「何キロで走つていようと、みな同じですよ」

私は、おそらくキョートンとした顔をしてしまったのだらう。中嶋さんは、もう少し丁寧に、詳しい説明を付け加えてくれた。

「どんな速さで走つていようと、視線は基本的に同じ。その速さで危険を見つけた瞬間、その危険を回避できる距離のところを見ているはずですよ。だから時速4キロで歩いているときは、自分の

傍を歩いている人や障害物を見ながら、ぶつからないように歩くでしょう。時

速15キロで自転車を走らせるときは、視線はもう少し遠くになり、時速40キロでクルマを運転するときは、視線がさらに遠くなります。けど、時速300キロでも何キロでも、クルマを走らせるときは、レースのコース上の障害物——事故を起こしたクルマの残骸や道路のバンパ（凸凹）など——を発見し、ハンドルを切ったり急ブレーキを踏んで、危険を避けることのできる距離にある場所を見つめて走るのが基本ですね」

中嶋さんに、この「ドライバーの視線の基本」を教えてもらったのは、30年ほど前のこと。そのときはまだスマホが普及していなかった。だから「スマホを見ながら自転車や自動車を運転することを、どう思いますか？」と質問することはなかった。

が、そのときの「視線の基本」の話から類推すると、中嶋さんは、きっとこう答えるに違いない。「それは、目を閉じて運転するのと同じですね」



夢劇場『馬』

No.40



極意

長田渚左

今年の競走馬のセリで新種牡馬イクイノックスの仔が5億8000万円で落札された。

母馬であるミッドナイトビズーの2025と紹介された当歳馬はまだあどけないが、額の流星は怪物と呼ばれた父とそっくりで、そのままミニチュアにしたようだった。良血と品格の高さで、2年後には一番人気でレースに登場するのだろう。

そう言えば、一番人気の馬に騎乗する不安と怖さを切々と語った騎手がいた。

「人氣が1・2倍なんて耳にするともう不安で3日も前から不眠になる。レースが近づくと朝から晩まで会う記者に馬の状態を尋ねられて、頭の中がその馬のことだけになっちゃう。レース当日は何十万というお客さんの目が自分の馬だけを見ているようでまた緊張する。ゲートインすると今度は出遅れちゃならないとまたドキドキする。前夜にうとうとしながら見た夢のような展開にはなる

まいと考えていると、その瞬間にゲートが開いて出遅れたりしたんだ」

——出遅れまいと思うと、逆に遅れたりする。

「そう、ゴルフのイップスみたいになる。前に出遅れて叱られたり、怒鳴られたりした記憶が、心の底からゾンビみたいに復活してくる」

この騎手は後に幾つものクラシックレースで勝利して名騎手と呼ばれるようになるのだが……。

——その迷宮からどうやって抜け出したのですか。「人より少しでも早くスタートしようという思いを捨てたんだ」

——どういう心境に変わったのですか。

「皆と一緒に出ればいいと思えるようになった。そうしたら安心感が増して一番人気でも何でも気にならなくなつた」

誰よりも早く、一歩でも早くスタートしたいという緊張が解けたことで出遅れは霧散した。極意を会得したのだ。陸上の短距離走も同じかもしれない。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。申し込み住所が変更になりました。

〒168-0063
杉並区和泉1-40-13-401
スポーツネットワークジャパン
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため、やむをえず変更いたしました。

6冊まで 送料 500円
12冊まで 送料 1000円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号第69号は2026年1月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読みになります。ご利用ください。

- 世田谷区八幡山・大毛社一文庫
- 世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館
- 港区広尾・東京都立中央図書館
- 千代田区永田町・国立国会図書館
- 港区芝・東京都人権プラザ図書館
- 新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

阿部雄輔／五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（国士舘大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）／森林貴彦（慶應義塾幼稚舎教諭）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192
埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。
都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に配置されています。

スポーツゴジラ®

2025年9月5日発行
第1巻第68号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳
波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

山内亮治・鈴木希人

制作 株式会社 プライム・オリジンズ

印刷・製本 株式会社 美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401